物語の内と外

青柳　宏

幼稚園の春 ―たゆたう時間―

春、新しい一年がはじまったばかりの附属幼稚園の五歳児クラスを参観させていただいた。子どもたちは、園庭のそこかしこ、思い思いの遊びをはじめている。少し遠く離れたところから保育者を呼ぶ男の子の声。その声ののびやかさ。なぜ、こんなにも子どもの声がのびやかなんだろう。そして、本当に一人ひとりの子どもが自分から動き、自分から自然に何かを見つけている風景。桜の花びらが舞い、まるで時間そのものがたゆたっているかのようだ。

春の、たゆたうような時間の中で、子どもたち一人ひとりが本当にやりたいこと、やってみたいこと、見つけたいものをゆっくりとさがしている。こんなにまで自然な幼稚園の風景は、保育者たちの、積み重ねてきた省察と、その省察から導かれた今日

の実践が生み出している風景である。四月になって、新たにはじまった幼児と保育者のかかわり。保育者はまず子どもたちに、このクラスでは自分が本当にやりたいこと、見つけたいことをさがしていいんだよということを、言葉ではなく、全身で、しかも穏やかに子どもたちに伝えている。幼稚園の春、保育環境というよりも、保育者の思い、保育者の穏やかなまなざしそのものが、子どもたちののびやかな声、たゆたう時間を生み出している。

夢の虫

私が、広い庭の、その中にある築山にのぼっていこうとしたところで、五歳児のA君が話しかけてきた。築山の上で、A君は、手に持ったビニール袋の中をのぞくよう私に示しながら、「これ、夢の虫なんだ」と言う。たしかにビニール袋の中には虫が入っている。それにしても、「夢の虫」とは、何ですてきなネーミングだろうと感心してしまう。

「(近所の)Kさん家の本、ぜーんぶ見たけど、こんな虫でてなかった。だから、この虫は、夢の虫なんだ」と言いながら、A君は袋の中の虫をよく見るよう、私にうながす。それにつられて、袋の中の虫を子細に見ると、確かに、「見たことがない」と思わせられる不思議な虫だった。私も、A君の気持ちにつりこまれるように「本当に見たこと無いね」と思わず言ってしまった。

A君は、さらに「(この虫は)アメリカから来たと思う」と言う。また、「(だから)アメリカに返さないと」とも。そして、「いっぱい赤ちゃん産むんだ」と言う。また突然、「ぼくのお兄ちゃんはアメリカから来た」とも言う。

ところで、A君は、お父さんが外国人、お母さんが日本人ということ。だから、「この虫は、アメリカから来たと思う」「アメリカに返さないと」というA君の言葉は、私にはA君自身の思いがそこに込められているのではないだろうかと思わせられもし

た。

また、A君の言動を見ていると、他の子に対して命令口調で言うことが多い。だれか他の子を自分のやりたい遊びに誘いながらも、「ここに立ってて」「こっちにはこないで」「こういう風にしてて」と命令が多い。だから、せっかく遊びに加わってくれた子も、そのうちにいやになってA君から離れていってしまう。また、他の子どもたちがやっている遊びの中にA君が入っていくと、今度は、小さなことをきっかけに他の子からとがめられ、遊びから抜け出てしまう。私が、もう一度仲間に入れてもらおうと誘っても、A君自身も「(あの子たちは)友達じゃないから」と言う。

なぜ、A君は命令口調で言うことが多いのだろうか。それは、おそらく、A君にとって、他の子は自分の思い通りにならない、というよりもっと、自分の言うことはそもそも聴いてくれない存在であると捉えているからではないだろうか。もっといえば、他の子どもたちのことを「自分を疎外する存在」として捉えてしまっているのではないだろうか。実際、A君と他の子どもたちのかかわりを見ていると、他の子どもたちがA君を疎外していると思わせられることもある。他の子からすれば、A君のこれまでの言動の記憶から、逆にA君が信頼できず、結果としてA君を疎外してしまうということかもしれない。

他者を自分を疎外する者として捉え、他者が信頼できなければ、他者に対しては命令口調で話さざるを得ないだろう。しかしまた、そのように他者に接することは、他者から疎外され続けることにもなり、A君の「孤立」は続いてしまう。そして、このような疎外し疎外される関係の中で生きることは、A君とA君の周囲の子どもたちに限らず、幼稚園教育、学校教育の中で生きる子どもたちの共通の問題(あるいはまた社会の中で生きている大人たちの共

通の問題）であると思う。しかし、この問題をより深く考えていく前に、今一度、A君の「夢の虫」にもどりたい。

「これ、夢の虫なんだ」「アメリカから来たと思う」「アメリカに返さないと」「いっぱい赤ちゃん産むんだ」等のA君の言葉は、私には、A君のA君自身に向けた物語であるように思われる。夢の虫について話しているA君の表情は、やさしい。周囲の子どもたちと接する時にしばしば表れるけわしい表情のA君とは別人のようだ。虫の入った袋の中に砂をそっと入れながら、「砂の上だと落ち着いた」「あら、もう寝ちゃった」と言いながらほほえむA君。また、夢の虫についてひとしきり語ってくれた後、A君は、幼稚園のチューリップが咲いているのを遠目に見て、「おばあちゃんの家のチューリップは、つぼみがふくらんでいるよ」と話してくれた。

疎外し疎外される関係の中にいても、子ども（人）の内からは、物語が生まれてくる。また、花のつぼみがふくらんでいることにも気づく。子ども（人）の心は、現実に自分が生きている人間関係だけに縛られるものではない。あるいは現実の人間関係に縛られながらも、物語が内から生まれてくる。A君の話（物語）を聴きながら、私は人間の自己のはらんでいる広がりと深さに改めて感動していた。ただ、もちろん、疎外し、疎外される関係という私たち自身に共通の問題を、個の物語という視点だけから考えて済ましてしまうわけにはいかない。しかしまた、この問題を考える前に、同じく附属幼稚園で十年近く前に出会ったB君の物語にもふれておきたい。

チータとサメ

五歳児のB君は、A君と同様、他の子どもたちとなかなかうまく関係がつくれない男の子だった。ある時などは、B君自身がトイレに入っていた時に、たまたまトイレに入ろうとしてやってきた女の子を

なぐってしまった。何か意地悪をされたわけでもなく、何か言われたわけでもないのに、他の子をなぐってしまった「理由」は何なのか。B君はなぐりたくてなぐったわけではない。それは、B君のその時の真剣な表情から伝わってきた。でも、なぜなぐってしまったのか。

この当時、B君のいる学級で、私は担任の先生といっしょに「五歳児の話し合い活動と物語づくり」というテーマで何か実践的な研究ができないかと試行錯誤していた。クリスマスが近づいたある日、私は、二つの言葉から物語をつくってみるという、イタリアの童話作家のジャンニ・ロダーリの方法を借りて、物語づくりの簡単な実践を行ってみた。子どもたち自身がまず各自何か好きな言葉をカードに書き、そのカードを私が集め、それをシャッフルしてから二枚のカードを取り出し、偶然取り出された二つの言葉を使って物語をつくるという一種のゲームである。

たとえば、「クリスマスツリー」と「ハムスター」というカードが取り出された時のこと。子どもたちはそれぞれ、「ハムちゃんがクリスマスツリーの電気をガリガリとかじった」「ハムちゃんがクリスマスツリーのわたの中で遊んでた」等の素朴な物語をつくった。ストーリー性よりも、まさに「電気をガリガリとかじった」「わたの中で遊んでた」等の「物」の実感から語り出された物語である。ところで、B君はこの時、次のような物語をつくった。

「ハムスターがクリスマスツリーにのぼって、ほしを食べようとしたけど、人間に邪魔されて食べれなかった」。

B君のこの物語から、この日担任の先生と話し合いながら、B君は「何か自分がしようとすることが、だれか（人間）に邪魔されてしまう」という感覚を日常的にもっているのではないかということに思い当たった。

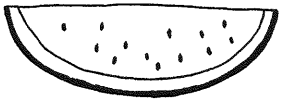
ところでまた、この後、日をかえて、グループに

分かれて、話し合いながら物語をつくっていくという実践も行った。六人ずつのグループで、最初に保育者が物語の第一行を言い、その後、子どもたちが話し合いながら物語をつくっていくのである。私は、B君がいるグループに参加し、まず「ひろーい野原に大きなもみの木が立っていました」と物語の最初の一行を提示する。この後、子どもたちは話し合いながら登場人物を決め、また最初の登場人物は「カエル」に決定したところで、ある子が「まず、カエルがピョコンと野原にとびだしてきました」と言うと他の子どもたちも同意し、さらに話し合いながら物語をつくっていった。物語の大要は、野原にとびだしたカエルは、そこにやってきたおじいさんが家に持って帰り、カエルはかごの中で飼われることになるが、おじいさんの留守中にチータがやってきてカエルを野原につれかえる。おじいさんは追いかけて野原にいくが、カエルの「おれは野生になりたいんだ」という言葉をうけとめ、「もみの木から離れないでね、そしたらごはんとかたくさん持ってきてあげるからね」というおじいさんの言葉で物語は終えられる。

物語づくりの中で、B君がこだわり、そして自分の意見を強く主張していたのは「チータ」の行動についてである。話し合いの中では最初、チータがカエルのかごをやぶってカエルを自由の身にした後、二匹は別れ別れに逃げていくというように物語は進行していた。しかし、B君は「チータがカエルを口にくわえてここ（野原）に連れてきてくれた」としたいと主張し、さらに自ら口を開けて実演しながら、「チータがおれを口にくわえてかみくだかないように、歯は上にむけて隠して、ここまで連れてきたんだ」とカエルのおじいさんに言うセリフを語ってみせた。また、B君は、グループを新たにして行った物語づくりの中でも、「サメ」を登場させ、またそのサメが、小島に取り残されたリスのために、口を大きく開けて、リスを傷つけないようにし

て口の中に乗せ、家へ連れて帰ってあげるという物語を語った。

このように、B君がこだわり主張したのは、ふだんは他の動物をかみ殺して食べたりする動物（チータ、サメ）が、その「力」を「やさしさ」に変える物語である。自分のしていること、したいことが邪魔されるのではないかと、つい手が出てしまうB君。でも、その心は、力をやさしさに変えていく物語を懸命に語っていた。やはりこの時も、私は、人間の自己のはらんでいる広がりと深さに感動していた。



物語の内と外

A君、B君に見るように、子ども（人）は、疎外し疎外されるかかわりの中で生きていても、心の内からは、そのような関係を超える物語が生まれてくる。物語の外側、即ち、現実の人間関係をうまく生きられない苦しみが内側の物語を産む一つの要因なのだろうか。

ところで、先に述べたように、現実の人間関係、特に疎外し疎外される人間関係とは、子どもたちにとって、また私たち（大人）にとっての共通の問題である。心の内側から物語が生まれてきても、外側の人間関係が変わっていかなければ、と思う。もちろん、心の内側から生み出される物語は、外側を変えていく力になると思う。しかしまた、個人の物語が本当に生かされる組織や社会、疎外し疎外される人間関係を超えていく組織や社会を意識的につくっていく努力がなければ、物語はいつまでも、個人の内側に生き続けるしかないのではないか、とも思う。

たとえば一つの職場の中でも、時として、人は人を疎外し、疎外されてしまう。職場でなくても、ふとしたかかわりの中でも、妬みや嫉妬、無視や差別的なふるまいをしてしまうこともある。子どもは、そのような大人のふるまいを見て育つ。そこで育ま

れてしまうものは、内から育まれる物語の力を弱くしてしまうだろう。大人が自分の人間関係を見直すことを自覚的に行わない限り、内から生まれる子どもの物語（大人の物語も）は、やがて窒息してしまうかもしれない。私たち（大人）は、知らず知らずに、人を妬み、憎み、差別していることがある。そのような大人の狭い心から生まれる物語には限界がある。だから、私たち自身も、より深く広い物語に接したいと、心のどこかでいつも願っている。

ところで改めて、なぜ人は人を疎外してしまうのだろう。私は、その大きな要因の一つに、自発性の問題があると思う。もっとこうしたい、こんなこともしたい、そして自分にはきっとそれができる。そのような生き生きとした自発性をもてなければ、人は人を妬んでしまう。本当の自発性の欠如、無力感が、妬みや嫉妬、無視、差別を生み出す一つの大きな要因であると思われる。

ここで、冒頭にしめした幼稚園の春の風景にもどりたい。そこでは、保育者が、本当の自発性を育もうとしている。自分がやりたい、見つけたい、その心の求めるままに、体を動かし、声を出している子どもたち。そんな中で、今度は、また別の一人の男の子が「先生、ちょっと」と私に声をかけてくれた。そばにいってみると、コンクリートの塀の下の方、小さな小さなミノムシが蓑から頭をほんの少しだけ出して、塀を少しずつのぼっているのを男の子はじっと見つめている。自然の命のうごき、外側の、自然の中で起こっていることが、実は子どもの内側の物語を育んでいる。あるいは内と外が交歓し、子どもの物語は生まれてくる。外側の自然が、子どもの物語を育むようには、大人の社会は上手に子どもの物語を育むことができていないように思われる。しかし、私たち大人も、心の内でも、外（社会）でも、本当はもっともっと、深くて広い物語を求めているはずである。

（宇都宮大学教育学部）